

第17期うきたむ学講座（2025年度）

第1回講座

講座②

『野川扇状地と最上川氾濫原の 微地形と古地図・古記録』

山形大学名誉教授 阿子島 功 氏

令和8年2月1日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

野川扇状地 と 最上川氾濫原の古絵図と古記録

阿子島 功

1. 野川扇状地

一の堰・二の堰・三の堰

「牛の涎」記にある「宝暦七年洪水」「宝七洪水の森観音堂の墨書」
「嘉永5年平山村絵図」の水田等級に読む木蓮川洪水の痕跡
「明治初期字切図」「明治43年1:50,000地形図」

2. 野川扇状地と最上川氾濫原の境はどこか

ままの上・(元)ままの下

全国のまま地名 寒河江扇状地にも

3. 最上川氾濫原

みずはの小道(平野川下流)は最上川の跡
川の港 最上川堤防のなかった頃

4. 長井市の洪水ハザードマップ

野川の氾濫・扇面水路の氾濫・最上川氾濫

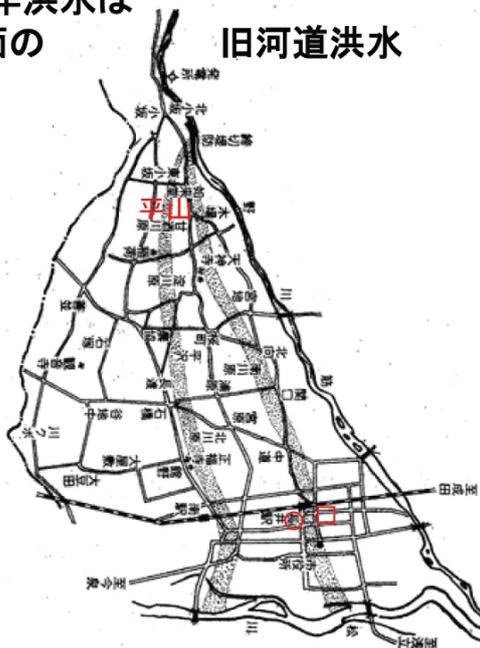
5. 県内の扇状地の水利と水害

山形市 馬見ヶ崎川扇状地の「五堰図」と旧河道
文政七年申(さる)の「洪水の一件」
米沢市 松川扇状地 直江石堤のねらい

6. ヘル、ナスカ川の灌漑地下水道プキオと旧河道

1. 長井市 野川扇状地

宝暦7年洪水は
扇面の



長井市史 2 ●

宝暦7年5月24日 (1757年7月10日)夜半から大雨、
25日朝に平山の締め切り堤防が決壊した。

長沼牛翁 (宝暦11年生まれ~天保5年) 著の随筆
「牛のよだれ」によれば、 []は注

(宝暦7年5月) 二十五の朝、平山[扇頂]の方を見るに、
田畑の上真白に一段と高く見えたれば、

油断すべからず、はやく朝飯を食いしまえとて、
食いおわらぬに早一度にドッと押し来る、戸・壁
わらわらと破れ、川原町の家の内 帯にとどく、

平山より・白・杵・戸・障子・絹・櫃・家具・樹木
一面に落(流)れ来る。

宮村□片倉城址 (卵の花の城と云う)に (土手) 登り
見る [浸水していない微高地か]に、
陣の峯まで一面 海の如く白波を揚げたり、

○摂取院の北の方、昔城溝の田と成りたる所、
白(・)小屋など流れたり。

六月二十五日に ようやく川原町の家に至る事を
得たり、

・ 森観音堂の板壁の落書きでは洪水流を龍神と呼んでいる；

宝暦七丁丑ヒトウシ、大出水、五月二十四日夜、

人馬・家屋敷田畑皆亡す (没す)、

龍神出る、野川、小出村へ罷出る、又ハ沈る、、先代の話也、

(長井市史 2, p. 415-416による)。

2. 野川扇状地と最上川氾濫原の境はどこか

ままの上・ままの下

野川の勢力範囲 と 最上川の勢力範囲 ⇒洪水ハザードマップ

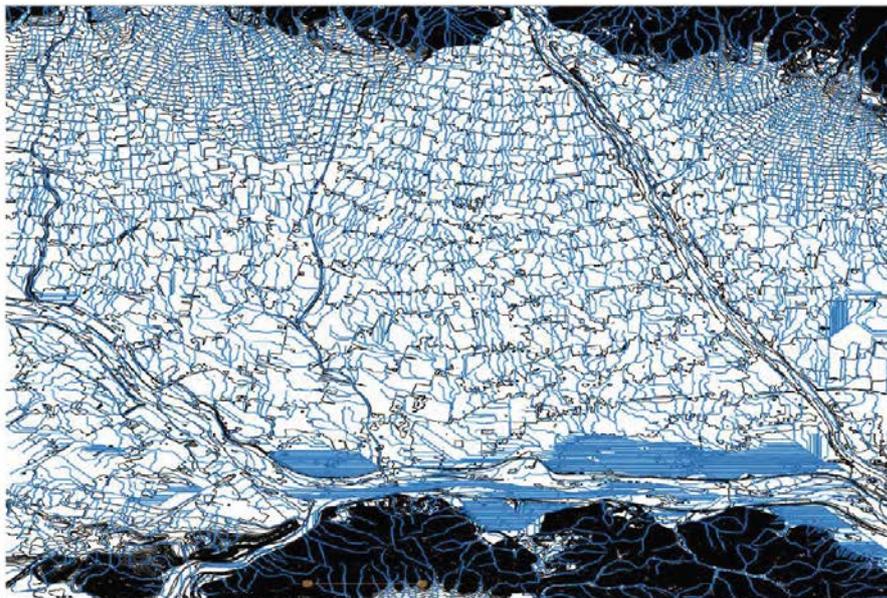
全国のまま地名



段差

扇端微高地

氾濫原 最上川



扇状地

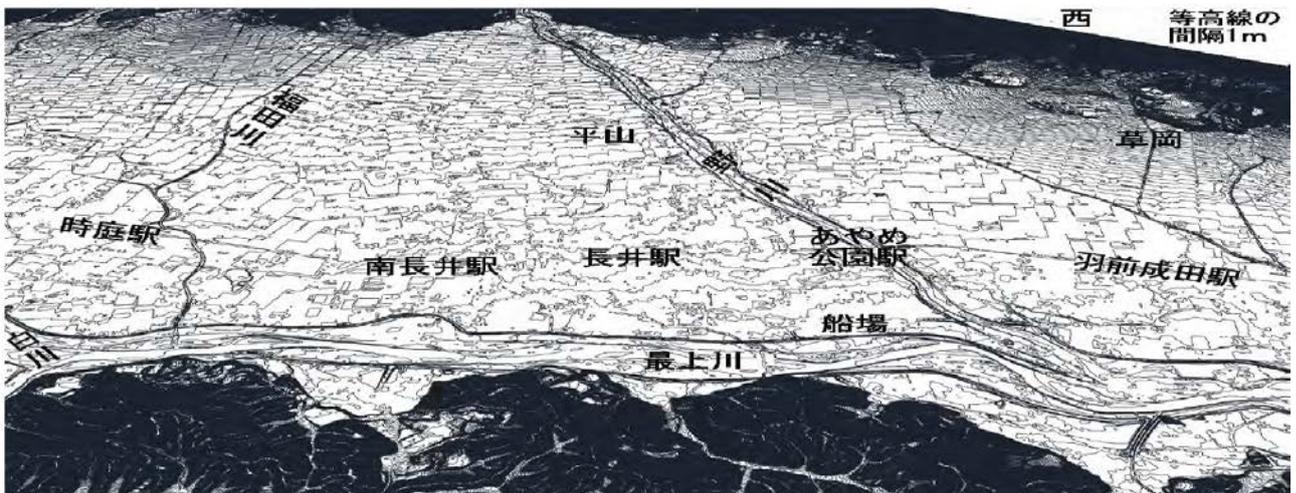
西から東へ下る水系

南から北への水系
最上川氾濫原

自動計算した水系図——賢い??

等高線間隔2m

高低の扇状地面



西 等高線の間隔1m

2 (2) 全国の“ママ”という地名

- **ままの上**(ままのうえ) 山形県長井市 長井市役所で紹介された 郷土史家の方の話によると、JIS漢字になく不便だという理由で、「岫の上」の地名を昭和59年に「ままのうえ」にしたというのです。 実際は、「岫」の字は、この地名から取られたJIS漢字であったのにもかかわらずということですが、当時の漢和辞典は、JIS漢字に対応していませんでした。 昭和25年に **ままの下** を統合
- **満々下** (ままのした) 山形県寒河江市日田満々下
- **俣ノ上**(ままのうえ) 宮城県刈田郡七ヶ宿町
- 群馬の地誌によると間々は「土が心のままに崩れるところをいう」とある
- **壙下**(まました) 相模 に関して「崖のはずれをママという」【地名辞書】壙の字は心のままの壙を土へんにしただけ
- **壙之上**(ままのうえ)静岡県伊豆の国市 地誌に「土堤の敷地と馬踏との間をママという」とある 上総・信濃でも土堤のことをママという 崩れはしないが高地の側面
- **真間**(まま) 千葉県市川市 万葉集に見える勝鹿(かつしか)の真間(まま)の入り江 または 麻万(まま)の浦 果たして 東葛飾郡市川市大字真間のことか
- 相模の愛甲村あたりでは **崖地をママクズレ**という ・ 武蔵には **崩崖上(ままうえ)**という地名
- **万々** 高知県高知市
- **間々**(まま) 愛知県小牧市
- **間々原新田**(ままはらしんでん)愛知県小牧市
- **真々川**(ままかわ) 福島県大沼郡会津美里町
- **壙下**(まました) 神奈川県南足柄市
- **間々田**(ままだ) 栃木県小山市
- **間々田**(ままだ) 埼玉県熊谷市
- **馬間田**(ままだ) 福岡県筑後市
- **真々地**(ままち) 北海道千歳市
- **壙之上**(ままのうえ) 静岡県伊豆の国市

2 (3) 野川扇状地と木蓮川

野川旧流路 農業用水・木流し

扇頂部で取水 三堰
 一の堰 (石止め) 栃木堰(左岸・北岸)へ
 二の堰 (木の葉止め) 中村堰・荒川堰へ
 三の堰 (むしろ止め) 木蓮堰へ

→菅野ダム(S28) 北岸と南岸(地下サイフォン)に分流
 →右岸合同頭首工(S46)より(南岸)中村堰・荒川堰・木蓮堰に分流



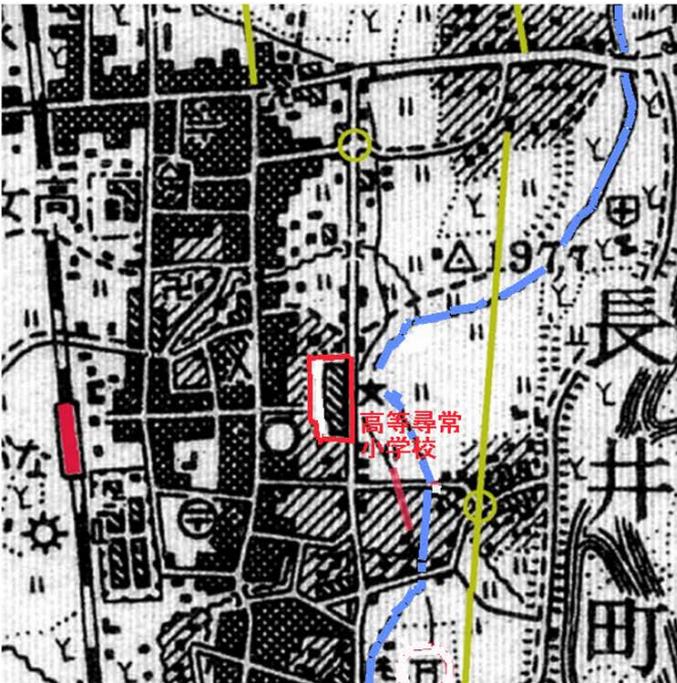
取水口は活断層の小崖あたりでもある

3 最上川氾濫原

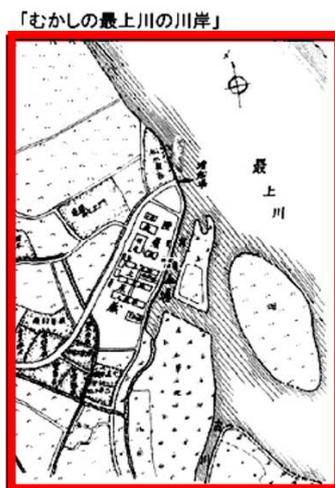
みずはの小道(平野川下流)は最上川の跡



最上川旧河道(緩)へ 扇状地河川(急)が注いでいる



ままの上はままの下



③ ② ①古川
竹田1992「舟場というところ」

川の港は 最上川旧河道(古川)の合流点にあった
堤防はほとんどなかった。

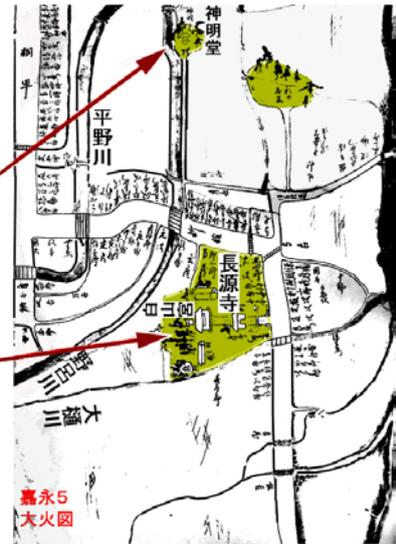
明治後期でも連続堤防はなくて、
自然堤防をつなぐ低い堤防道があった。

自然堤防(微高地)にあった
避病院はよく浸水したという。

■ (低湿地) 水田を示す



M43(1910)年測



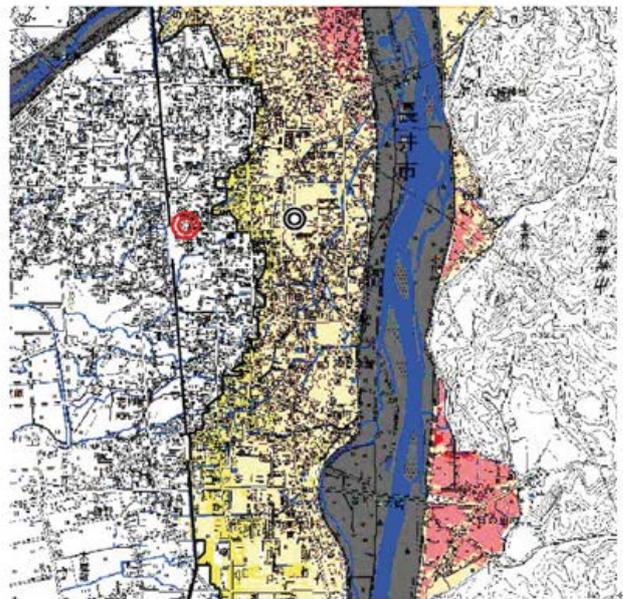
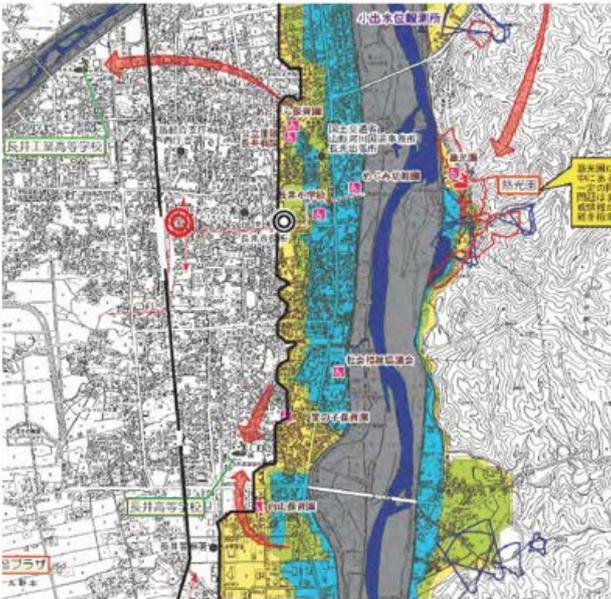
1852
嘉永5
大火図

4 最上川洪水ハザードマップ

最上川氾濫範囲の想定

旧版

改訂版



◎元の市役所

最大降水量を確率 1/100 としたときの氾濫想定

最大降水量を確率 1/1000 としたときの氾濫想定

1000年に1回の降水規模の洪水があった?? ⇒ **考古遺跡なら経験している可能性** ⇒ 災害考古学



南台遺跡(20)をはじめ古代(古墳・奈良・平安時代)の遺跡は扇状地にある。

堀切遺跡(22 奈良・平安時代)のみは最上川氾濫原内にある。

台遺跡(1)は大楯川の氾濫原であろう。

白山館(9 中世城館)は最上川氾濫原内の微高地にある。
これが立地当時から最上川氾濫原内の自然堤防であったのか、
立地当時は扇状地の扇端で後に最上川蛇行によって切り離されたのか
はまだ判断できない。

氾濫原のなかで埋没している遺跡はまだ発見されていない。

■ 縄文時代 ■ 古墳奈良平安時代 ■ 戦国期館跡

山形県立博物館蔵 洪水之一件 市村幸夫 訳記

市村幸夫(2016. 7)「馬見ヶ崎川 文政七年申(さる)の洪水」山形県立博物館友の会会報第27号 より

(前兆)八月初頃より井戸水一統に過出し、山鳴震動する事折々也。諸人奇異の思ひをなす処に、
 ○十三日夜亥の刻ばかり、東方蔵王が嶽にあたって迅雷一声し大雨ふり出し恰篠をつくがごとし。

翌8月14日(扇端外縁で浸水始まる)

○午刻に馬見ヶ崎出水し、秋元但馬守様内水道奉行高山司殿・関口紋重郎殿出馬あり、

○銅町(下流扇端)へ押出、街水深き事三尺余、町外の茶屋三軒相流るる。

8月15日

○薬師河原(下流扇端側)新石垣やぶれ、田畑林をながし 大悲山円応寺町の御堂へ水鼻むく。

宮町人家をやぶり下冠木に押出し 両所宮境内 水溢れかかる。成就院比丘寺の両鐘楼にて早鐘を・・
 (扇頂締切堤破堤)

○折しも小白川天神裏石垣(締切堤)三重の内 二重午刻までは打やぶれ、三の石垣へ水鼻向、
 此石垣といふは、享保年中の洪水より以来たもち来り、幅四間高サ六・七尺、木通つる松柏のたぐひ
 石間より生茂り 殊に大石をもって築きたれば堅固言うばかりなし。

・・・猶不足たるによって大久保朋兵衛下知として天神林を切らんとす(水門を木流しで防御)、
 別当威徳院役僧を以て是をこぼむ、みだりに斧を入り給バ、神廟の御あたりや有なんと申しければ・・・

○天神林二・三十間の場所一同に押やぶり、専称寺河原(扇頂部旧河道)へ押いたす、
 その勢いあたかも猛虎岩をつんづくがごとし、

(扇中央部の河道沿い洪水)

○万日裏河原(扇中央部旧河道)へ流出、此処にて水 三方へ分かる

○一筋は 万日裏南旅籠町梅屋敷へ流れ入り、人家を破り街道へ押しだし、一保久町を横切(る)と
 (三ノ丸)堀へ落ちる

○一筋は 大蔵山(社寺林)の南(の)田を流し、行蔵院境内へ押、門前四軒を相流し、
 夫より・・・を下り 大橋(旧河道沿い堰の橋)へ落ちる

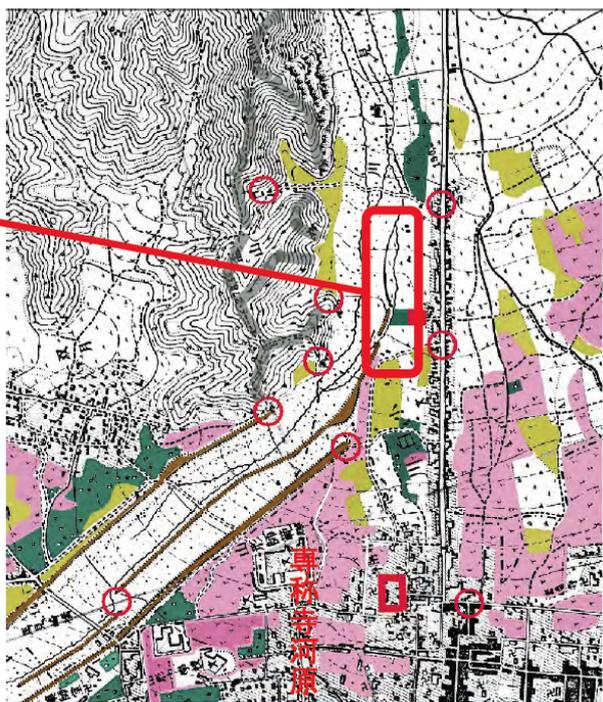
○一筋は 極楽寺と万日(万日念仏堂)の合を通り大橋へ落ちる

小白川天神裏石垣(締切堤) 三重の内 二重午刻までは打やぶれ、三の石垣へ水鼻向、

此石垣といふは、享保年中の洪水より以来たもち来り、幅四間高サ六・七尺、木通つる松柏のたぐひ
 石間より生茂り 殊に大石をもって築きたれば堅固言うばかりなし。・・・

亥刻ばかり・・・天神林二・三十名の場所一同に押やぶり、専称寺河原(扇頂部旧河道)へ押いたす、

かつて3重の霞堤と水門があった。



M34年測1:20,000地形図



文化15(1818)年の水道方の絵図の写本

5 (2) 米沢市松川扇状地

さかさハの字の“霞堤”

(2) 直江石堤のねらいは？

一何を守るつもりだったのか

文化年間 谷地河原御手伝川除絵図 (林泉文庫)

明治41年測量1:50,000地形図

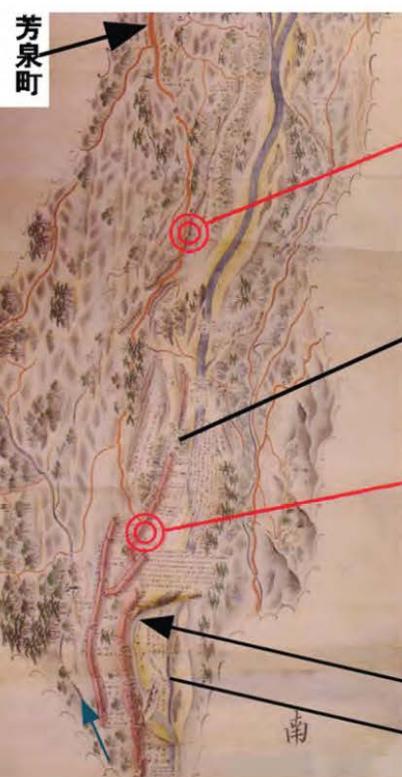


石堤の表現



直江石堤の調査 1994

米沢 直江石堤のねらいは？



何を守るつもりだったのか

蛇堤

堤防切れ目

谷地河原堤

水衝部

旧河道

○ 締切

扇面の松川旧河道を閉じて、城下を洪水から守るといよりは、直近の芳泉町（下級開拓武士団）の水防、利水をはかったのではなかろうか。
米沢城・城下の水利は、より上流側の扇頂部の「猿尾堰」などで取水する「御入水」がある。